

されたものであって、収録された22編の論文はいずれも *Journal of Siam Society* 誌上に掲載されたり、*Thai Culture Series* の一つとして刊行されるなど、いずれも既発表のものばかりであるが、その中には一般の読者の目に触れにくいタイ週刊紙に掲載されたものも含まれており、これが今回一書にまとめられたことは、利用者を益するところ大であろう。

全編は、「文化」、「言語・文学」、「民話」、「仏教関係」、「各種儀礼」の5編に分かれ、巻末に、William J. Gedney 訳の“The life of the farmer”が付されている。

内容をみよう。

I. 文 化

1. タイ文化の手びき
2. タイ国の諸文化
3. タイの伝統的文化
4. ローイカトン祭

II. 言語文学

1. タイ諸文化の伝播とタイ文学
2. タイ文学
3. サワッディ・ラクサー考
4. タイ語の性格と発展
5. タイ語

III. 民 話

1. タイ民話研究
2. 毒菓 (yāsang) 考

IV. 仏 教

1. プラチェディ (仏塔)
2. ジャータカ説法 (Thēt Mahāchāt)
3. 伝統的な敬意のあらわし方

V. 各種儀礼

1. 豊作祈願儀礼
2. クワンとその儀礼
3. タム・クワン儀礼
4. タイの婚姻慣習
5. タイの護符
6. チャロック占い
7. 植物に関する迷信

付録 “農民の生活”

アヌマン教授の、タイ語による業績は、御本人も mai khoei nap(数えたことがない)と言われるほどの膨大な量に及ぶ。本書はその一端を示すにすぎな

いが、およそ、タイの伝統文化について知ろうとする者が最初にひもとくべき書物と言ってよいであろう。

1958, Cornell 大学 Southeast Asia Program, Data Paper の一冊として刊行された *Five papers on Thai custom*, HRAF から出た *Life and ritual in old Siam; three studies of Thai life and customs*, New Haven, 1961. (内容は一部本書に再録) とならんで、今回本書が世に出たことは、この不世出の大学者の業績に親しむ層を、さらにひろげる役割を果たすものとして歓迎したい。

(石井米雄・東南ア研)

Asmah Haji Omar and Rama Subbiah. *An Introduction to Malay Grammar*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1968. pp. 154 + xii.

本書はマレーシア人が英語国民に対して書いた文型タイプのマレー語教科書の最初ではないかと思う。Asmah 女史はインドネシア大学学位を持つ新進の国語学者で、サラワクの原住民の言語の調査なども行なっている。Rama Subbiah 氏はロンドン大学博士号を持ち、現在マラヤ大学のインド研究科で教鞭を取っている。

内容は2部に分かたれる。第1部は21課のレッスン、第2部は15編の新聞・雑誌からの抜粋である。

各レッスンは、文法的説明と練習と語彙の3部に分けられている。文法的説明の大きな特徴は、従来のマレー語では試みられなかったパターンの設定をしていることである。マレー語をどこまでパターン化し得るかということで興味をもって読んだが、テキストとしての性格が強く、便宜的なパターンであったので、その点は失望させられた。文型としてあげられているのは、N(nominal) n (nominal) (これは dia mahasiswa のように名詞を二つ並べると繫辞がなくとも文になること)、N₁(subject) A (adjective), N₁V (verb), N₁VT (time word/group), N₁VL (locative group), N₁VN₂ (direct object), N₁VN₃ (indirect object) N₂, N₁VN₄ (locative object) で、この変形として N₁VT は

N₁TV でも TN₁V でも良いとか、N₁VN₃N₂ は受身の形になると N₃N₁VN₂, N₂N₁VN₃, N₃VN₁N₂ のいずれかの形になるということが付け加えられている。また N₁, N₂, n には名詞群 H (head) M (modifier) または yang+M で代替される。このパターンは動詞が他動詞か自動詞かによって大きく分類されているのではあるが、一方、動詞そのものの分類は文型のように、自動・他動の区別ではわり切れないようである。動詞は接頭辞、接尾辞のつき方によって8種類に分けている。その上に aspect verbs として sudah, belum などのことばを一括している。文法としては、かなり実務的便宜的に構成されていると言えるが、言語学的には種々の問題がある。

文型による説明をとりながら、練習問題がそれに十分なだけ付されていず残念である。この点、King の *Speak Malay, Write Malay* などのほうがより首尾一貫して文型練習に徹底しているようである。

単語は、「ポピュラー」なもの700語に限定してあると言うが、これも早く語彙使用頻度調査などがなされるべきであろう。選ばれた単語は大学、高校で使う学校マレー語のような感が強い。

後半の読本の部分は中途半端でむしろ前半の練習などをもっと強化すべきであろう。

誤植が散見されるが、早く第2版を出して、より良いテキストとなることを祈っている。

(前田成文・東南ア研)

Robert Ho. *Farmers of Central Malaya*. Dept. of Geography Publication, Research School of Pacific Studies, Australian National University, 1967. pp. 108.

このレポートの基礎となった調査は、著者の Ho 教授がマラヤ大学の地理学主任教授であった1965年の2月から3月の約4週間にわたって大学生を指導しながら行なった面接調査である。対象には、パハン州のトゥムルロ区の四つのムキムに住む約2000人

が抽出されている。

調査地の一つの大きな特徴は、沼地 (paya) における稲作を行なっていることである。この点水田 (sawah) 耕作田報告とは違って、ほとんど報告がなされていないので参考になる点もある。また、稲作と同時にゴム園についても調査されている。

報告の構成はまず調査の方法について述べたあと七つのセクションに分割されている。第1章は文化的・自然的背景として、移住の歴史、人口、交通、自然環境、土壌、植生などに簡単に触れている。第2章は土地資源で、土地利用、土地所有について述べられている。土地所有に関するデータはムキム単位の土地登記帳(約2千件)に基づいている。このデータに種々欠陥があることを十分認めた上で、性別、規模別による土地保有の状況、土地の共同所有、所有の形態と土地利用の関係、女性の所有者などについてデータを作表して相関関係などを調べている。

第3章は paya 耕作そのものについて述べている。特に技術的なことを除くと水田耕作と社会的経済的に顕著な差異は見られない。著者は生産に影響を与える要素を抽出するために色々の相関図を用意しているが、とにかく paya 農民の生産率が低いということは言えるとしている。それでも米を買わねばならない世帯は17%しかない。

全体の31%は田を持っていないが、88%の農民は田のほかにゴムによって収入を得ている。このゴム栽培について第4章があげられている。ゴム栽培についても米作同様、生産要因について表とグラフによって説明されている。

第5章にはゴムに関する政府の土地開発計画とゴム植替え政策が調査地と関連して述べられている。第6章の結論では、その他の作物と農業外収入および農家収入が推計されている。著者の結論は paya 耕作が時代遅れであり、その残存は他の経済的發展をまで阻害する傾向にあるという。

地図と図表の豊富な報告で、短く手際良くまとめられている。しかし、もう一步深めた所にあるマレー農民のイメージというものはこの種のレポートから期待するのは無理なことであろう。Ho 教授はこのほかにマラヤでの調査の報告の抜刷をセンターに送付されている。

(前田成文・東南ア研)